



第247號 (第 22 卷)

(昭和17年)

今年の天象

“1942年”

久しく中絶してゐた年鑑を、この1942年度から又々發行する。しかし、時局からでもあり、なるべく用紙を節約する意味で、新しく別刷を出すことは止め、“天界”の特輯號といふ形を採る。勿論、只1回の特輯號だけでは濟まないで、之れを2回に分け、この一月號は天體の豫報的なものを主とし、更に七月號には、恒數的なものを多く集めたいと思ふ。従つて、一月號と七月號と、此の二冊を一括して、從來の“年鑑”一冊分に匹敵するわけとなる。

この“1942年”は、天象が一帶に平凡な歳である。各遊星の陰顯や、近接交蝕などにも、珍しいものは無い。3つの日蝕も、皆、部分蝕で、しかも其れが南極や北極方面で見えるものばかり。月蝕は、皆既に2つも起るけれど、何れも東洋では全く見えない。火星も遠い。只、強ひて言へば、春から夏へかけて、早曉の東天に金星が永く見え續けることと、輪の幅を擴げた土星が臺灣あたりの頭上から去らないこと、それに、太陽の黒點活動が極小期に入つて、“無黒點”といふ日が連續すること等々が、學界の話題となるだらう。尚ほ、グリグ星や、ワルフ星そのほか、比較的に珍しい週期彗星が歸來することも注意すべきであるし、又、四月の琴座、八月のペルセウス座、十一月の獅子座、十二月のオリオン座等の諸星座から現はれる例年の流星群が、今年は何れも月の光に妨げられなくて、便利よく觀測し得る都合にあることは、喜ばしいたよりである。黃道光や對日照にも大遊星の光輝の干涉が無いから、此の方面の收穫は多からう。

其の他、新彗星や、新流星群や、木星面や土星面に思ひがけなく突發するかも知れない様々の珍象の發見は、こゝに全く豫言すべき限りでない。

同様に、恒星界にも、新星の出現や、不規則變星の爆發の如き奇現象が人智の豫想を超へて、何時起るかも知れないのであるから、戰亂のために異狀を來たしてゐる世界の學界の進歩を促進するために、餘裕ある人士は大いに奮起しなければならない。又、今年、ガリレオが死し、ニュートンが生れた1642年から、恰も300年目に當ることも、記憶すべきであらう。(山本)

1942年の編曆週期

干支……………壬午、
エパクト……………13、

金字週期……………5、
聖日符號……………D、

太陽週期……………19、
ロマの律會……………10、